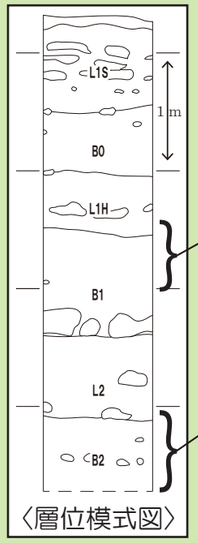
蓑毛小林遺跡の旧石器時代

日本に人類が移り住んできたのは約４万年前のことと考えられています。その後、縄文時代が始まる約１万６千年前までが「旧石器時代」です。当時は現在より寒冷・乾燥した気候で、いわゆる氷河期にあたり、人々は食料となる植物や動物を求めて移動しながら生活していました。

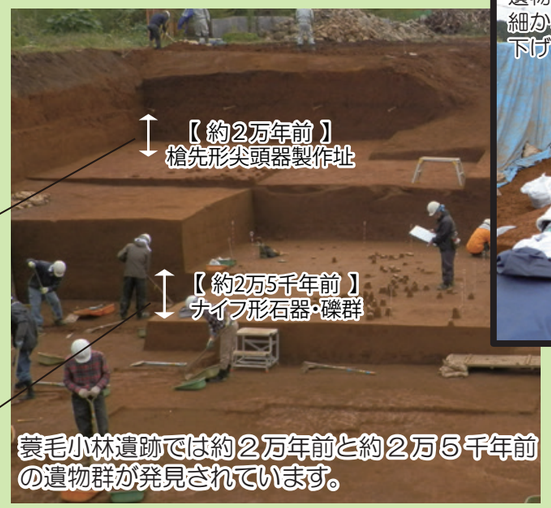
蓑毛小林遺跡ではこうした人々が石器を作ったり、火を使った痕跡が数多く発見されました。出土した石器は石器製作の時に生じる砕片（石くず）を含めると５万点にも及びます。これらの遺物は大きく２時期に分けられます。

１つ目は約２万年前の遺物群で、槍先形尖頭器を作った跡です。完成した石器のほか、壊れたり作りかけのもの、製作途中で生じたと見られる砕片など、合計３万点という膨大な量の石器が見つかっています。

２つ目は２万５千年前の遺物群で、こちらはナイフ形石器や掻器と呼ばれる石器、加熱調理施設と考えられる「礫群」、砕片や剥片、石核が多数出土しました。



〈層位模式図〉



蓑毛小林遺跡では約２万年前と約２万５千年前の遺物群が発見されています。

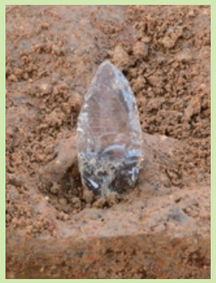
遺物の出土地点には竹串を刺して目印とし、細かな遺物は取り上げながら少しずつ掘り下げていきます。

【槍先形尖頭器製作址（約２万年前）】

約２万年前の槍先形尖頭器が、破片や作りかけのものも含めて250点以上見つかっています。

小さなものは約２㎝、大きなものでも10㎝未満です。主に黒曜石、安山岩、凝灰岩という石で作られています。膨大な量の砕片が一緒に出土することから、遺跡の中で槍先形尖頭器を製作していたことがうかがえます。

県内の同時期の遺跡としては、これ程多くの槍先形尖頭器が出土した例はなく、南関東まで見ても稀有な遺跡です。



この時期の槍先形尖頭器に使われている黒曜石はどれも透明度が高く、信州産のものと考えられています。

蓑毛小林遺跡では膨大な量の砕片が見つかり、調査区東端部では砕片が約１mの厚さにわたって密集していました。

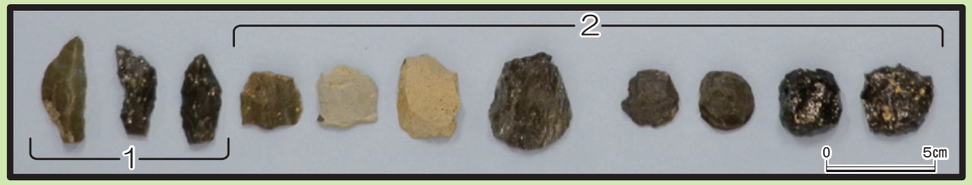
槍先形尖頭器の素材と考えられる、比較的大きな剥片が多く見つかりました。

石材が採れる別の場所でこの大きさに割ってから、遺跡に持ち込まれたものと考えられます。

槍先形尖頭器に加工途中のまま置かれた剥片も多く見つかっています。

この剥片は右側半分が槍先形尖頭器として加工され、左側半分は未加工のままです。

【ナイフ形石器・掻器と礫群（約２万５千年前）】



１：ナイフ形石器
２：掻器

約２万５千年前に蓑毛小林遺跡で作られていた石器は主にナイフ形石器と掻器でした。

ナイフ形石器はナイフや槍先として使用する万能石器と考えられています。掻器は柄を付けたり、指で持ったりして、動物の革なしをするために使われる石器と考えられています。

この時期の遺物群は槍先形尖頭器の遺物群よりも大きく広がっています。これまで合計で２万点近い石器が出土しており、現在も一部が調査中です。

現在のところ、この時代の遺物群は秦野市内では最古の人類の痕跡となっています。

焼けた石がまとめられたもので、肉などの食料を焼いた石の上や下に置いて加熱する、加熱調理施設と考えられています。

こうした礫群は10数ヶ所見つかっています。

文化庁
AGENCY FOR CULTURAL AFFAIRS
地域の特色ある埋蔵文化財活用事業

考古学財団

新東名高速道路（秦野市蓑毛地区）
建設事業埋蔵文化財発掘調査
蓑毛小林遺跡 発掘作業見学会資料
2016（平成28）年12月17日
公益財団法人かながわ考古学財団
〒232-0033　横浜市南区中村町3-191-1
Tel：045-252-8689/HP：http://kaf.or.jp